第46回「てのひら文庫賞」岐阜県読書感想文コンクール
最優秀賞・岐阜県教育委員会賞　作品

最優秀賞・
岐阜県教育委員会賞

5年てのひら文庫部門／読んだ本・アイガモが育てるゆかいな米作り

一石五鳥のSDGs

垂井町立府中小学校　衣斐彩未

一つの田んぼで主食とおかずを作る。こんな一石二鳥なゆかいな米作りを三十年以上前に生み出した古野隆雄さん。合がも水稲同時作は、今や世界に広がっていて、実は私の家の近くの田んぼでもアイガモ達が働く光景を見ることができる。

五月、私は学校で初めて田植えに挑戦した。代かきを終えた田んぼは、水面が輝き、どこまでもまっすぐだった。いざ入ると、予想以上に足をとられ、すぐに泥だらけになる上、農家さんと同じように植えているのになかなかうまくいかない。そんな私達に、試行錯ごをくり返して、真心こめて出来上がる米はきっとおいしいと、教えてくださった。

昔のように自然なものを肥料に使う、無農薬の有機農業をやろうと決心した古野さんは、たい肥作りに半年かけている。やっとの思いでたい肥を入れて田植えをしたのに、次は、草取りに悩まされる。次から次へとのびる草とウンカに追われる十年。朝四時から日ぐれまで草と虫取りをするのに、他の農家の七分の一しかお米がとれないのだから、とんでもない話だ。けれど、古野さんは最初の志を曲げず、アイガモの話を聞くと、すぐさま取り入れるのだから、すごすぎる。ヒナ達はどんどん食べるので、これで草取り問題は解決したかに思えたが、今度はヒナが野犬におそわれる問題が出てくる。ここまでくると、苦労の連続過ぎて、試行錯ごどころではない気がしてしまう。でも、古野さんはあきらめない。それは、稲だけでなく、鳥や人間、田んぼや周辺の水路、川にいる生き物の命を大切にしようという気持ちがあるからだと思う。結局、野犬との三年のたたかいを制したのは古野さん手作りの電気さくだった。失敗の度に、よく観察して対策し、改ぜんし続けた古野さんは本当にすばらしいと思った。

合がも農法は、草取り、虫取りだけでなく、アイガモが動き回ることで、稲に刺げきを与え、よりよく育てることができる。さらに、フンは肥料となり、そして最後は、大きくなったアイガモを食べるという、ちく産でもある。もはや一石五鳥のSDGsだ。

このアイガモが食用になることに、一しゅん「かわいそう」「農家の人はつらくないのか」という考えがよぎった。一緒にすごした日々を思うと、命を大切に思う農家さんだからこそ、心を痛めているのではと思ったのだ。でも、私達の食卓には今日も野菜や肉・魚などが並ぶ。その中には、人間の都合で、制限された中で育てられた食材もある。その一方で古野さんは、アイガモを自由に田んぼの中で育つことができるようにしている。それは、アイガモ達へのおん返しかもしれない。実際、アイガモ達は田んぼの中で生き生きと活やくしている。「米一つぶにもたましいが宿る」と聞いたことがあるが、日本人は昔から作物が「生きている」ことを感じていたと思う。毎日、当たり前のように食事をするから、ついつい忘れてしまうけど、私はたくさんの命をいただいて、そんな命に関わっているたくさんの人々のおかげで、今日も私が私でいられる。残さず食べる。感謝して食べる。そして、そうやってきちんと食べて、私は今日も目標に向かって取り組んでいく。「かわいそう」と思うことよりも、合がも農法や、全ての食べ物が自分の命の一部になっていくことを理解して、自分をめいっぱい輝かせて生きていくことを私は大事にしたい。

苦労しても発想を変えて、前より発展させていく。家族とともに、合がも水稲同時作をつくった古野さんのように、私もくじけない前向きな気持ちで挑戦していきたい。まずは、私達の米作り。秋の稲刈りでは、お世話になった農家さんに感謝を伝え、仲間とていねいに作業しよう。そして、米作りを通して学んだこと、農家さんの思いと自分達にできることを結び付けて、積極的に発信していきたい。

※無断での転用・転載を禁じます。